

僕と一輪車

加藤 健太郎

初めて神余小の正門をくぐった時、すぐに僕の目に飛び込んできたのは、一輪車だった。

ある休み時間、一輪車に乗っている人を見ていた僕に、五年生が声をかけてきた。「一輪車に乗ると楽しいよ。」その言葉で、一輪車に乗れるようになっていたと思った。それから練習を始めた僕は、すっかり、一輪車の魅力にとりつかれてしまった。

でも、初めは全く乗れなかった。そんな僕に、今度は乗り方のコツを五年生が教えてくれた。少し乗れるようになった僕は、もつと上手に乗りたくて、必死に練習した。やがて一輪車パレードに僕も参加できるようになった。

パレードでは、上級生みたいに上手に乗れるようになって、一生懸命がんばっ

た。上級生はわかりやすく指示を出して、みんなをうまくまとめていた。

今は六年生となり、下級生に教える立場になった。一輪車パレードでは、全体をまとめなければならぬリーダーにもなった。

ところが、思うようにみんなが動いてくれなかった。あの頃の六年生のすごさがわかった。でも、パレードを完成させたくて、あきらめずに最後までがんばった。

僕にとって一輪車は、夢と希望を持つことやあきらめないことの大切さを教えてくれた宝物になっていた。一輪車を通して学んだことを中学校でも生かしていきたい。

